

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

マラガシ語：インド洋を渡った言語

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菊澤, 律子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009044

マラガン語

—— インド洋を渡った言語

菊澤律子

●怪鳥ロックのいた(?)鳥●

アラビアンナイトやインド神話にあまり親しんでいない方でも怪鳥ロックの名前は耳にされたことがあるのではないのでしょうか。あるいは、インドネシアの国営航空の名前にもなっているガルダの方がピンとくる方もいらっしゃるかもしれません。これら伝説の鳥たちに共通するのは、魔法の力を持っており、そして、象をくちばしで持ち上げて連れ去ってしまうことができるというほど大きいということ。ここまで聞いて、あつ、知っている、と思われる方もたくさんいらっしゃるでしょう。でも、古い時代のインド洋で、実際にその大きな鳥の羽からつくられた水を入れるための容器がつかわれていた、ということをご存知の方はあまりいないのではないのでしょうか。

そうなのです。鳥の羽の軸からつくられたので、この水差しは筒の形をしていました。大きなものでは直径二〇センチ以上もあったそうです。一本の羽の軸からこんなに大きな水差しがつくれるのですから、その持ち主である鳥がど

んなに巨大であったか、想像してみてください。えつ、本当ですか、ですって？磨き上げられた美しい水差しを自慢げにみせるインド商人の話が有名なブズルク・ブン・シャフリヤールの航海日誌にも記録されているそうです。一〇世紀の記録です。そしてこの貴重な水差しは、インド洋貿易の西南端、マダガスカルという土地からくるのだ、ということでした。

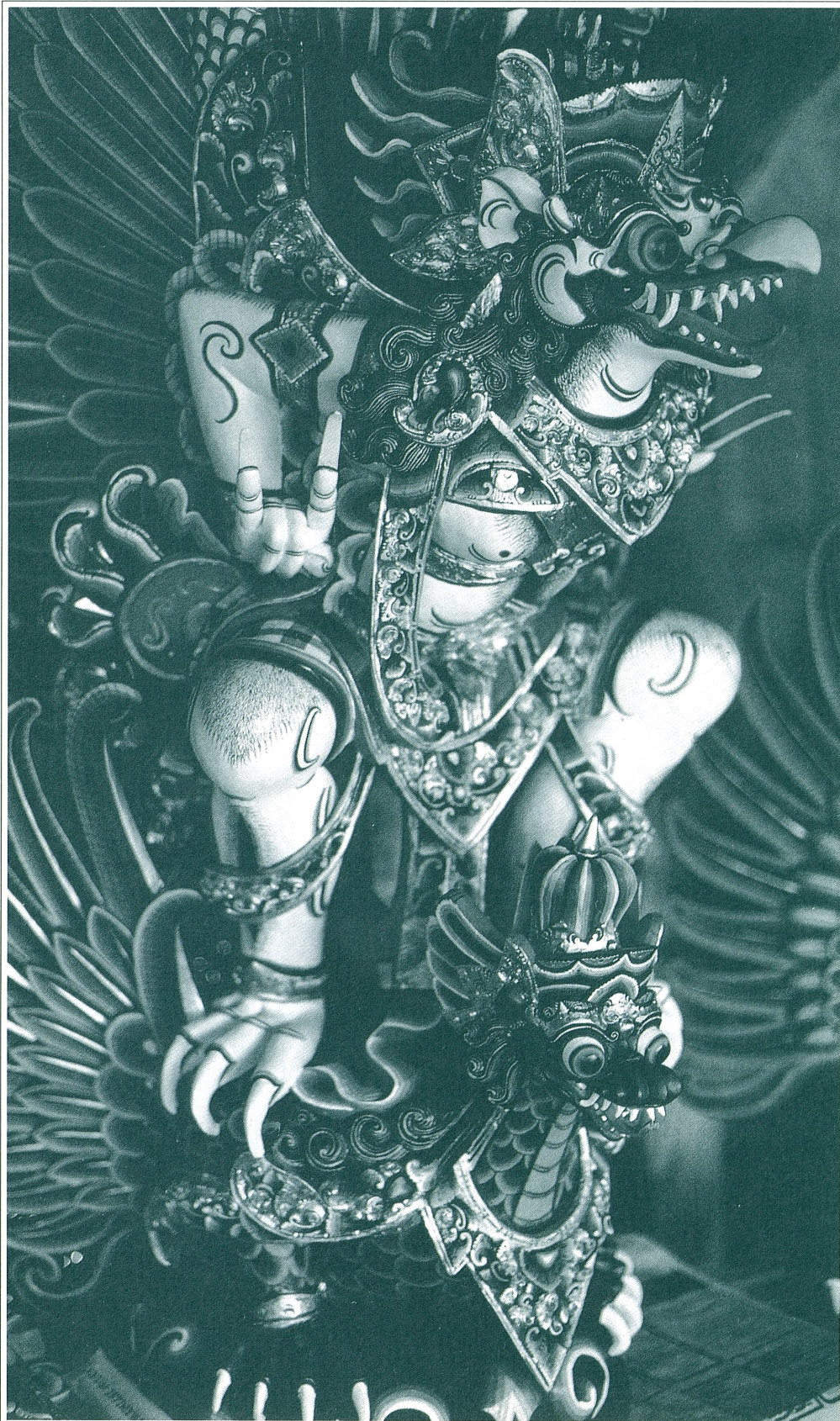
航海においては水を入れる容器はなくてはならないものです。ましてやそれが伝説の魔鳥の存在を裏付けるものであるならば、単なる水差し以上の重みを持つものとしてインド洋貿易にのり、アフリカ東海岸を経てペルシャ湾、そしてインド亜大陸へと運ばれたと思われます。同時に、この羽の持ち主である鳥のことや、その鳥がいる大きな鳥の話も人びとの口から口へと伝わったことでしょう。インド洋のさまざまな地域でいろいろな人がこの水差しを見て魔法の鳥に思いを馳せたに違いありません。

さて。この鳥の羽の軸でできた水差しの誕生

には、実はマダガスカル言語が一役かったという説があります。マダガスカルでこの「ヴル（*vor* 鳥の羽）」でできた水差しを手に入れたのはおそらくアラビア商人でした。アラビア語圏に古くから言い伝えられていた巨鳥の伝説、そしてマダガスカル固有種で身長が三メートルもあったというダチョウに似た鳥（*Aepyornis* 一七世紀に絶滅）の存在を背景に、この水差しが鳥の羽でできていると聞いたとき、それはどんな代価を払ってでも手に入れる価値のある貴重なものに思われたかもしれません。

ところが、マダガスカルでヴル（*vor*）というときには、実はもうひとつ別の意味がありました。それは「竹」です。早い時代のインド洋周辺地域で竹が存在したのは東南アジアとマダガスカルだけでした。まだ竹という植物を知らなかったアラビア商人、筒状の水差しが鳥の羽でできていると聞いて信じてしまったのも無理はなかったのかもしれませんが、ですから、この鳥の羽には、よくみると節があつたはずなのです。

現在でもマダガスカルで地方を訪れると、竹でできた水差しを肩にかついている人とすれ違ふことがあります。通常、直径一五センチ長さ



二メートルほどといいますが、村のおばあちゃんもつと細い竹に水を汲んでいるのを見たこともあります。自然の竹をそのまま利用するので、自在にサイズを選べるのも利点のひとつで

しょう。いずれにしても一番底の節を残して内部を空洞にしたもので、家では壁に立てかけておきます。

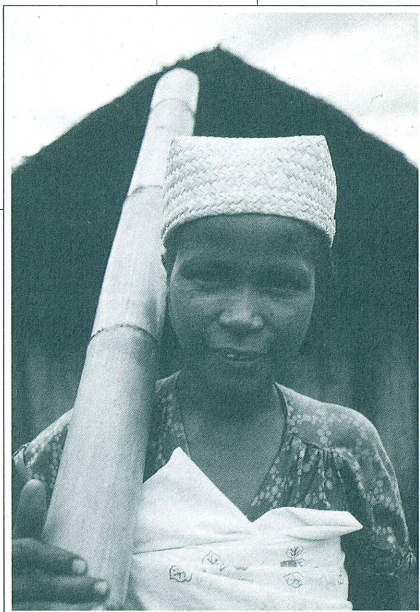
●マダガスカルの言葉のルーツ●

鳥の羽に化けた竹の水差し、誤解を生ぜしめた歴史的背景のひとつとしてマダガスカル言葉が近隣の言語とは異なっていたという事実が指摘できます。そう、マダガスカル言語——マラガシ語^{註1}——は、地理的に近いアフリカ東海岸の言葉とも、貿易で使われたスワヒリ語やアラビア語ともまったく違ってきます。それではこの言語と一番近いかというと、なんとインド洋を渡った反対側にある太平洋の言葉なのです。

言語の関係が近い、あるいは系統が同じというのは、簡単にいえば「祖先様がおなじ」ということです。マラガシ語は、現在太平洋やその周辺部で話されている言語と同じ言語（祖語）から発達しました。これらの言語をまとめて、オーストロネシア諸語と呼びます。インドネシアやフィリピンでは現在、千を超えるオーストロネシア系の言語が話されていますが、マラガシ語はその中でもボルネオ島で話される東南バリト言語群というグループに属する言語にもつ

とも系統が近いということ
で研究者の意見は一致しています。このことから、マラガシ語話者の先祖にあたる人びとは何らかの理由でボルネオ島を離れマダガスカルに到達したことがわかります。時期としては紀元後七世紀ごろと考えるのが妥当なようです。

マラガシ語には現在でも東南バリト言語群から分岐したときに持っていたと考えられる特徴がみられますが、このほかにもインドネシアで話される他の言語、ジャワ語やバタック語などの影響も受けたようです。これがボルネオ島を出てからマダガスカルへ渡る前のインドネシア地域内での交流の結果なのか、それともマダガスカル定住後にインドネシアから訪れてきたこういった言語の話者との交流の結果であるのかについては、現在のところ意見が分かれていて結論がでていません。



竹を使った水汲み道具をもつタナラ族の女性(堀内孝撮影)

●オーストロネシア起源の要素と新しい環境への適応●

さて、水差しをつくるのにつかわれた「竹」を表す語ウルは、マダガスカルの人々がインドネシアを離れたときすでに持っていた単語でした。太平洋側で話されている言語にも、ウル・ウ(wulu?)、ブル(Bulu)、ブホツ(Buhots)のように、マラガシ語のウル(wulu)と見た目は少し違うけれども専門的に分析すると同じ語源をもっていることが明らかである単語をたくさん見つけることができます(註2)。約五千年前に話されていたこれらの言語の祖先にあたる言語では、この竹を表す語は*bulu(註3)のような形をしていました。

一方、水差しに入れる水の方ですが、マラガシ語ではラヌ(rano)といます。これもウル同様に太平洋から一緒にわたってきた単語です。もともとの語は*danu(註4)でした。現在のインドネシアでは単語が変わってしまいワイ(wai)やウエ(ue)のような語が多くなっていますが、台湾原住民語やフィリピン言語ではダルム(dalom)、ナヌム(nanum)、チュム(chum)などの語が見られ、その分布を見るとマラガシ語が古いほうの形を維持していることがわかります。さらに、鳥の羽をあらわす語は*buluであったと考えられています。この語はオーストロネシ

ア諸語全般で現在でもよく使われており、とくにインドネシアでは、多くの言語でウル(wulu)、ブルング(bulu)、フル(fulu)のような形が見られます。羽の持ち主であるところの鳥をあらわす語は、上の三つとは少し事情が異なっています。

マラガシ語のウルナ(woluna)と同起源の語はボルネオ島のバリト語族の言語のみに見られ、このようなところにマラガシ語の起源が垣間見られるわけです。

このように現在のマラガシ語がオーストロネシア起源であることは明らかです。ところで、マダガスカルはインドネシアの島々とは環境が異なりますから、最初に到着した人びとにとって見慣れない植物や動物などもたくさんいました。そのような場合には、太平洋側にあったもののなかで似たものの名前をあてはめてつかうようになりました。たとえば、最近日本でも観葉植物としてよく見かけるインド・クワズイモ(Alocasia sp.)はサトイモに似た形の葉がつるつとした植物ですが、これは太平洋全域にみられる植物で古い名前は*piraqです。マダガスカルにはこれに似た植物(Typhonodorum sp.)があるのですが、クワズイモを示す語をそのままあてはめ、

ヴィハ(viha)またはヴィア(via)という名前になりました。このほかに、根から染料をとることのできるツル性の植物の名前フーニチャ(bonina)は、同じく染料をとるのに用いられたウコンを示していた語*buluをあてはめたものです。マダガスカル固有種として有名なキツネザル科の動物のアイアイ(Aiaia)という名称もアルマジロの一種を示す語*qarimからきたものであると語形の方は説明できるのですが、ここまで違うと意味の関連性を見つけるのが少し難しいですね。

いずれにしても、マダガスカルに到着した人々はこのように、太平洋から持ってきた言語を新しい住処の環境に適応させながら独自の言葉を発達させました。現在でもマラガシ語には太平洋地域の言語と似た単語がたくさんみられます。また、ここでは単語の例だけをあげましたが、実はマラガシ語がオーストロネシア起源であることを示す特徴はむしろ文法構造に顕著にみられるのです。ここでは詳しくお話しできないのが残念です。

●インド洋交易とマラガシ語の発達●

さて、インド洋交易を通じて伝説の鳥の羽でできた水差しを各地に送り出したマダガスカルですが、自らもまたその影響を受けて発達しました。いくつもの地域で九〜一五世紀のペルシャの陶器や中国の陶器の破片などが発掘されており、外部との交流がさかんであったことを物語っています。

もちろんこのことは言葉にもよく反映されており、マラガシ語には交易につかわれたアラビア語やスワヒリ語から入ってきた単語がたくさんみられます。また、マダガスカルで最初に使われた文字はアラビア文字で、東南部のアンテムルとアンタバファカと呼ばれる地域で実用化されました。

マジュンガを中心とする北西海岸地域はコモロ諸島などから交易で訪れる人びとが船をつける場所でした。商人たちとの意思疎通の必要性から、東南部より実用的な面でアラビア語やスワヒリ語の影響を受けたといわれています。それにこの地域の船乗りたちは航海に出るときにはスワヒリ語またはアラビア語で書かれたマン・サファアラ(Mansa'ala)と呼ばれる航海ルートの本をお守りのように携帯していたそうです。これらの言語の影響はマダガスカル全土に広がっ

たものも多くあり、現在でも使われているものとして、たとえば曜日の名前をあげることができます。

マラガシ語にはまた、サンスクリット語起源の単語もたくさんあります。たとえば一月、二月といった月の名前は古くはサンスクリット語起源のものが使われていました。サンスクリット語では一〜二月はPṛatibhaḍṣaですが、マラガシ語に入ってマカ(Maka)、もしくはヴラマカ(Varamaka)は「月」という意味)という語になりました。面白いことにこのサンスクリット起源の名称、実は同じ名前でも地域によって示す時期が違っています。たとえば、ツイミヘティ語ではマカ月といえ三月のことであるのに対しメリナ語では四月、バラ語では六月、アンテムル語では七月、アンタヌシ語では八月、といっ

●地域方言の発達●

さて、地域差がみられるのは月の名前に限られたことではありません。日本の各地に方言があるようにマダガスカルにもいろいろな方言がありますし、標準語もあります。標準語は現在首都があるメリナ地方の言葉がもとになってい

た具合です。つまり、九月にマダガスカルで「マカ月にマダガスカルに来たのですよ」と話をすると、「八月に着いたのでまだひと月しか経っていない」という解釈から、長いものでは「三月に着いてすでに半年になる」という意味にまでなり得るわけです。でも、いったい、どうしてなのでしょう。それは、これらの月の名前が農耕作業の段階に対応していたからなのです。マダガスカルでは乾季・雨季のサイクルにあわせて農耕活動を行うのですが、雨季のはじまる時期が地域によって異なります。したがって、たとえば「田植えをする月」は地域によって少しずつずれることになり、その結果、農耕作業に対応した月の名前は、同じ名前でもあらわす月が地域によって違う、ということになったわけです。現在私たちが用いている月の名前やフランス式のもの「絶対月」であるのに対し、言ってみれば「相対月」とでもいったところですね。

ます。標準語を話すことができれば、どの地域に言っても意思疎通をすることができます、という点でも、そのかわり土地の人同士が方言で話したすと何をいっているのかわからない、という点でも日本の事情と似ています。

ちなみに竹でできた水差し、標準マラガシ語でラナーナナ(Lanana)といますが、地方へいくとラガーナガ(Laganaga)、ララーナナ(Lalanana)、ラガーナナ(Laganana)のように微妙に名前が変わります。また、猫のことは標準語ではサカ(ṣaka)ですが、東海岸ではピス(pis), もしくはプシ(ṣi), 犬は標準語ではアリカ(ṣi)に対して、東海岸ではキヴァー(ṣi)など、方言によつて形がまったく異なる単語もたくさんあります。

●マラガシ語の将来●

このように太平洋の西側からインド洋をわたってマダガスカルに到着し、さまざまな言語の影響を受けながら独自に発達を続けたマラガシ語ですが、一九世紀初頭にはロンドン宣教師会のジョーンズ牧師により、現在用いられているアルファベットによる書記法が導入され、その後フランス植民地化に伴いフランス語からの借用語がたくさん入ってくるようになりました。東南アフリカ市場共同体(COMESA)への加盟をきっかけに英語教育にも力を入れはじめていますし、観光ビジネスなどではその他の言語に興味を持つ人も増えてきました。怪鳥ロックの時代とはまた違ったグループの人々が違ったスタイルでマダガスカルを訪れ始めています。日本

ところで、私が調査をしているベチミサラカ地域では標準マラガシ語とは異なり、竹はヴォル(volo)、髪の毛はヴルンドハ(vorondoha)、鳥の羽はヴォルヴォルニ(volo-voloni)といったように、似てはいるけれども異なる単語を使います。もしアラビア商人が竹の水差しをはじめて手にしたのがベチミサラカ地域であったなら、伝説の怪鳥の羽からできた水差しは歴史に存在せずにおつたのかもしれない。

から訪れる人もだんだん増えてきました。そんななかで何かとても不思議なものがマダガスカルから届くことを期待してしまうのは私だけでしょうか。

遠い国からきた伝説の鳥の羽の水差しを大切にしまっていた人びとのこと、インド洋をわたる大移住。何をとりあげてもスケールの大きい歴史物語と切り離せないのが、私にとってのマダガスカル言葉です。

国立民族学博物館

〔註〕

1—マダガスカル現地語を示す語としては、日本語では現在、「マダガスカル語」と「マラガシ語」のふたつがみられます。ここでは、現地語の名称 by rany malagasy に従つて「マラガシ語」と呼ぶことにします。

2—さまざまな言語にみられる単語が同じ起源からきたものであるかどうかについては、単に形が似ているかどうかだけではなく、細かい発音の対応関係などを専門的に分析して特定します。したがって現在見られる単語の形が必ずしも誰が見てもすぐにそれとわかるほど似ているわけではありません。

3—言語学では、現在話されているいくつかの言語の単語を科学的に比較分析することで、昔つかわれていたであろう語形を再建することができます。このようにして再建された語を一般の単語と区別するために、*という記号をつかいます。